
木洩れ日

物干し竿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木洩れ日

【Nコード】

N9377X

【作者名】

物干し竿

【あらすじ】

話という話ではありませんが。

途方もなく暑い日でした。

1つの暦が終わり、向日葵が力の限り咲くころ。時計の短針は1の記号のやや右側。太陽の光が傲慢に地表を照らし続け、アスファルトがそれに応えるように熱を帯びています。空はとても青いのですが、陽が強すぎて、とても見上げることはできません。陽炎の向こう、遠くの方に、まるで氷山のような巨大な入道雲がもくもくと浮いていました。

陽が降り注ぐ地表の一端、とても広い芝生の公園の中、一本の長いアスファルトの道。その上を、一人の男の子と、一人の女の子が歩いていました。男の子は塗装の剥げた黒縁眼鏡をかけて、髪は一对の黒い瞳を隠しそうなほど長く、背は人並みに高く、どちらかといえは青年に近い年齢です。女の子はとても小さく、背は青年の腰あたりまでしかありません。白いワンピースから雪のように白い肌の腕を伸ばし、頭には赤いリボンをつけた麦わら帽子。リボンよりも鮮やかな赤色のシロップがかかったかき氷を、小さな掌を濡らしながら持っていました。女の子が先を歩き、男の子が後ろをついていきます。傍から見れば、彼らは年の離れた兄弟にも見えませんでした。しかし、彼らは全く似ていません。茹だるような暑さの中、男の子は声を発さずに女の子についていきます。一定の距離を保ちながら、まるでそれが、あらかじめ決められていたかのような正確さを以って、ゆつくりと歩きます。あちらこちらで鳴り響くセミの声は、男の子にとって何の意味も与えませんでした。どこかで笑う子供の声。涼しげな川面の音。グラウンドから響くバットの快音。こだまする鳥の声。どれもこれも、彼にとってはどこか遠い場所、誰も知らない異国の地で鳴り響く音に聞こえました。眩しい光が男の子にとつての世界を包囲し、ホワイトアウトしたかのように何も見えませんが、一つ見えているのは、目の前を歩く女の子。白いワンピース

を着ているせいか、彼女の姿までもが、熱い陽光に溶けていくように見えました。それは、彼の美德と、彼が生涯築き上げてきた価値の裁量をもとに、おおよそ愛や友情、努力のような、輝きこそすれ、苦みのなかにあるほんの一握の美しさのように感じられました。

「暑いのか？」女の子が男の子に振り向き、声を投げかけます。女の子の言葉は彼にとつて、揺るぎない臨場感を与えました。小さな手に持つかき氷から垂れた水滴が、アスファルトに落ち、すぐに消えてなくなりました。

「暑いな」男の子は呟くように答えました。

「食べる？」女の子はかき氷を男の子の目の前に差し出します。

「ありがとう。でも、大丈夫」男の子は口元に笑みを浮かべて言いました。

女の子は何も言わず、前を向き、小走りに先に行ってしまうました。男の子も特に気にした様子も無く、再びゆっくりと歩き始めました。彼にとつての世界で、音が再び離脱します。しばらく進むと、道から外れた芝生の広場に、大きな檜の木が佇んでいました。若々しい大量の葉がそよ風にゆれ、陽の光を拡散し輝いています。そのとても太い木の下で、女の子が座り込んでいました。幹に体を預けながら、どこを見てもなく、木陰の下でかき氷を食べています。男の子もしばらく考え、女の子の隣に、同じように座りました。木陰の下はとても涼しく、影のある部分とない部分で、まるで違う世界のようにでした。檜の木という世界樹に守られた世界は涼しくて、優しく、少し洩れた光でさえも、瞬く星のように、人に何かを伝えていっているのではないだろうか。そんなことを男の子は、涼しい風を肌を感じながら、目を瞑って考えました。ぼんやりとしながらふとポケットに手を当ててみると、何やら入っています。手を入れ取り出してみると、とても小さなブリキのゼンマイズミが入っていました。所々錆びていて、とても年季が入ったものでした。いつから入っていたのか、どうして入っているのか、男の子にはわかりませんでした。しかし、男の子にとってはどうでもいいことでした。それが例

え折れた注射針でも、割れたウズラの卵でも、遠い海のサンゴ礁の欠片やエーテル麻酔でも、男の子にとってはみんな同じでした。意味は何も変わらないのです。物が変わっているだけなのです。ゼンマイネズミを何回か巻いてみると、ギチギチと音を立てながら回り始めました。男の子は手の上でそれをしばらく見ていましたが、回り終わると、それを掴み、木陰の向こうへ、違う世界に放り投げました。すぐに陽の光で見えなくなりました。そして再び目を瞑りました。誰もしゃべりませんでした。誰も動きませんでした。そこに静かな時間は、確かな時間はありました。まるで未来永劫、ずっとずっと続かのように。

「セミ」

ふと女の子の声が出て、男の子は目を開きました。横を見ると、女の子は立ちあがって、食べ終わったらしいかき氷のスプーンを、檜の木の上の方へ指していました。男の子がその方向に目を細めて見ると、確かに、木の枝にセミがいました。羽化したばかりなのか、まだとても白く、羽は青く透き通っていました。

「ほんとだね」男の子は呟きます。

「セミってね、一週間しか生きられないんだよ」女の子は男の子に言葉を向けます。

「知ってた？」

「いや、知らなかった」男の子は相槌を打ちました。

「かわいそうだね」女の子はそう言って、再び上を見上げました。

女の子の表情は、とてもでは割りませんが、年不相応な、深い悲しみを孕んだ表情でした。

男の子は、とても困惑しました。女の子の言葉は、純粹な憐れみでした。それ以上も以下もありません。男の子にはわかっていました。それでも、彼にとってはどうしてもそう思えませんでした。

「…それは、違うよ」男の子は掠れるような声で、言いました。言葉にするかどうか、彼は迷いましたが、言葉が口から漏れていました。

女の子は不思議そうに男の子を見ています。

「一週間しか生きられなくても、セミにとってはそれが常なんだ。人間が百歳まで生きると、何も変わらないんだ。彼らは、可哀想なんかじゃない。可哀想と思っっているのは、僕たちだけなんだ。それは、少し身勝手だよね」

「…うん」女の子は神妙な顔つきで頷きました。

「生きることの長さなんて関係ないんだ。何が良くて、何が駄目かなんて誰もわからない。君は、君が可哀想かい？」

「可哀想じゃない！」女の子は強く頷きました。

「そっか…、そうだよね」男の子は一瞬、下を向いて口元を歪ませました。まるで苦痛に耐えるかの様に。しかしすぐに優しい笑顔を向けます。

「一生懸命鳴いているんだ。それをしっかりと、聴いてあげよう」とても力強く、まるで自分に言い聞かせるかのように、男の子は言いました。

「うん！」女の子もまた、力強く頷きます。

日差しはいつまで経っても弱くなりませんでした。それでも彼らは再び立ちあがって、もと来た道を歩いて行きます。その足取りは、とても軽やかでした。

とても、遠くに薄黒い雨雲が見えていました。じきに夕立が降るでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9377x/>

木洩れ日

2011年10月26日04時07分発行